

『価値論批判』 武田信照氏書評へのリプライ

小幡道昭

『価値論批判』は「近年のグローバリズムのなかで顕現してきた、市場の多彩な変容を射程に収めうる理論」を目指すと謳ってはいるが、内容はあくまでも抽象的な基礎理論である。迷路のような本書に対して、価値論に定見を有される武田信照氏が、相違を言い立てることなく、異説を異説として解説してくださったことにまずお礼申し上げたい。書評の大半を丁寧な紹介に費やされたのち、武田氏は最後に三つの論評を添えられている。以下では、このうち最初の二つに絞り、それに触発され再考したことを述べてみたい。

第一の論点は、価値形態論に関するものである。武田氏は、価値形態論の中心問題は『量的な表現を捨象した同質性の問題』ではなく、価値（交換可能性）をどのように量的に表現するか、つまり『量的関係』『性質の量化』こそが価値表現の核心だ」というのが、小幡による『資本論』の質量分離論批判だと解釈され、これに対して「価値実体とその大きさが最初に明らかにされていれば、価値形態論が無意味になるとみる必要はない。実体論は価値形態論にとっては、そこで展開される『交換可能性』の実体が抽象的人間労働であることを分析者の頭の中で事前に確認しているにすぎない」と論評される。とはいえ、武田氏のように「分析者の頭の中で事前に確認しているにすぎない」というだけでは、『資本論』の難しい議論はどれも割に合わないように思われる。どう読めば割に合うのか、価値形態論ときいただけで敬遠される方々にもわかるように説明してみよう。すぐにわかるのは、「貨幣が実在する市場」が理論的に捉えられるという効果である。市場なら貨幣があるのは当たり前だと思うかもしれないが、売り手の申し出る値段でなら、何でもすぐに買える「貨幣」の存在を理論的に説明するのは、それほど容易なことではない。現に今日大学で広く教えられているミクロ経済学をみても、その基礎理論では、財の交換比率を整合的に表示するための共通の「基準財」（ニューメール）は登場しても、マルクス経済学の原理論でいう「貨幣」はでてこない。一般均衡論では《「均衡価格」でなら「全面的な物々交換」ができる、

それゆえ「貨幣」は実在しない》というのが基本で、ただ《現実には理論通りにいかないから「貨幣」があるのだ》ということになる。

逆にマルクス経済学では、「貨幣が実在する市場」が基本であり、《すべての商品に関して需要供給が一斉に均衡することはない》と考える。このような市場を理解するには、《市場に持ちこまれた商品には、「価値」（さまざまな商品と交換できるという性質）が「内在」（潜在）しており、売り手はその大きさを「価格」で「表現」し「実現」しようとする》という想定から出発するのが早道で、この想定の意味を厳密に規定したのが価値形態論ということになる。詳しい説明は拙著に委ねるが、この価値形態論を精密に展開することで、混ぜたら区別のつかなくなるような同種商品には同じ大きさの価値があること、同種商品が同じ値段で売られても、売ることにかかる時間はバラバラになることその結果、売値は一定の水準の下方に放散する可能性があることなど、総じて、一般均衡論を基礎とするミクロ経済学ではみることのできない市場像が浮かびあがってくる。マルクス経済学はかつて近代経済学と、いわゆる労働価値説か効用価値説かで対立してきたのであるが、資本主義の歴史的な構造変化に研究の焦点が移るなかで両者の対抗軸も大きくシフトしたといってよい。

ただ、マルクス経済学に固有な市場像を理論化するためには、『資本論』を批判的に読みなおす必要がある。『価値論批判』ではその第1章で、『資本論』の第1巻第1章「商品」のテキストに即し、(1) 二商品の等置は両者に共通の「第三のもの」の存在を想定し、これを抽象的人間労働に「還元」してゆく「価値実体」論と、(2) 商品に内在するが直接「知覚できない」交換力が、「知覚できる」商品体の世界に「表現」され「現象」する「価値対象性」論とが読み取れることを示した。このような解釈にたち、「還元」によって抽出された「実体」を主語に立てたのでは「表現する」「現象する」という真意は伝わらないと(1)を批判し、価値形態論の固有の意義を(2)に求めたのである。

これに対して武田氏は、小幡が『量的関係』『性質の量化』こそが価値表現の核心だ」といっていると論評される。「性質の量化」というのは、商品に内在する価値という「性質」を、別の商品の「物量」で「表現」するという意味である。マルクスは「超感性的」*übersinnlich*なものが「感性的」*sinnlich*な姿で「現象」すると記述しているが、「感性」という訳語より「感覚」のほうがピッタリするところ、英語では五感で直接知りうることを「知覚」*perception*というそうなので、それにしたがえば、価値形態論の難しさは、けっきょく、「知覚できない」世界に属する性質を、どうやって「知覚できる」世界で量化

するかという、いわば超越論的認識の困難に帰着することになる。ただこれはあくまで「性質の量化」の話であり、物量と物量の交換比率にすぎぬ「量的関係」が核心だといっているのではない。それでは質量分離論に戻ってしまう。

「小幡氏は、量こそ価値形態論の中心問題だとされるが、私は商品価値が他商品の使用価値で表現される表面的事実の背後に、それが可能になるのはその他商品が価値を代表し、価値の化身となることによってであること、貨幣の魔力もここに淵源をもつこと等の質的問題がその核心だと考える」と武田氏は論評されている。しかし、このような量と質の分離、量を度外視した「同質性」、実体と形態の二分論こそ、肝心なところで、需給関係で価格がきまるとみるミクロ理論の市場像に対峙できなくなる根因なのである。武田氏は違つかもしれぬが、マルクス価値論を評価する論者に好評な「物神性論」（「私的労働」の「社会的労働」としての発現説）を含め、価値の「実体」は商品流通を通じて再評価され同質化されるという類の「見なし論」は悉皆潔く払拭すべきと私は考えている。《商品価値の大きさは需給関係から独立にきまる》という基本原理を曲げてまで、「見なし論」で労働価値説を擁護するのは本末転倒なのである。

第二の論点は、計算貨幣と信用貨幣の関係に対するものである。問題は、貨幣を整合的計算のためのニューメールだとするミクロ経済学に対して、マルクス経済学では実在型の貨幣が金属貨幣と同一視されてきたところにある。マルクス経済学の教科書では、商品からはじめて、まず金属貨幣を第一規定とし、だいたい進んだところで資本間の商業信用から銀行信用を展開し、そこで登場する兌換銀行券によって信用貨幣を説明する構成が一般である。だがこれでは、信用貨幣はあくまで金属貨幣を前提にした派生態となり、不換銀行券百年の歴史がうまく視野に収まらない。やむなく不換銀行券の根拠を国家による「強制通用力」に帰着させれば「貨幣国定説」と五十歩百、ここでミクロ経済学の貨幣観と区別がつかなくなり、マルクス経済学の詰みとなる。何が敗着だったのか。商品から導きだされる「商品貨幣」を「物品貨幣」と同定した一手だというのが私の見立てである。商品に内在する価値の「表現様式」として登場する「商品貨幣」は、異なるかたちで「実装」可能な貨幣のいわば「仕様」なのである。この「仕様」としての「商品貨幣」は、金属貨幣のような「物品貨幣」と抽象レベルを異にする。「商品貨幣」一般の概念から、「物品貨幣」と「信用貨幣」は等位に分岐するというのが、『資本論』

の価値形態論から質量分離論を除去することで探り当てた手筋だった。

武田氏はこれを「信用貨幣の金属貨幣との並行的形成」とよび、「私も商品流通そのものから信用売買が生じ、信用貨幣が生まれるというご指摘に同意する」と評価してくださった。四面楚歌の身には有り難くもあり、この際、細かな違いなど捨てるべきかと迷ったが、やはり、この「並行的形成」の中味は「信用売買は大方は債務証書を媒介とした売買であるが、それが持参人払いおよび価値の一般的な表現という形式を具えると、誰にでも譲渡されうる流通性を高めた信用貨幣に発展する」というのではすまない。現金売買が先行し、その困難を解消するために信用売買が派生するという順序で信用貨幣を説明するのでは「並行的形成」にならない。資本主義的生産を前提にした、商業信用・銀行信用論を、商品・貨幣論にそのまま移植するわけにはゆかない。「支払手段」という貨幣の機能論のレベルではなく、それに先行する商品の価値形態論のレベルで、「物品貨幣」と「信用貨幣」を包含する「商品貨幣」一般の概念を確立することこそ、懸案なのである。

そのためには、金属貨幣に自然と行きつくように設計されている『資本論』の「価値形態論」を抜本的に見なおす必要がある。「交換手段」を基本としたアダム・スミスの貨幣観に対して、武田氏が参照を勧められるチュルゴーや、ジェームス・スチュアートなどの「計算貨幣」を本質とする貨幣観は、たしかにそのヒントになる。こうした論者は、貨幣を交換の「道具」とみるのではなく、その本質を、商品で構成される社会的な富の大きさを計測し表示する「価値尺度」として捉えていた。価値形態論から直接導出されるのは、「金属貨幣」に「実装」されるまえの、したがって、その代わりに「信用貨幣」にも実装可能な「仕様」としての「商品貨幣」だというのが眼目なら、この可換性を示唆するには「商品貨幣」より「計算貨幣」という呼称のほうが適切だという提言には一理ある。

とはいえ「商品貨幣」も「計算貨幣」も所詮ラベルにすぎない。問題はそれで指し示そうとしている概念にある。武田氏は「チュルゴーはまたこの計算貨幣の観念的抽象化を論じていて興味深い」というが、この「観念的抽象化」の内実こそ、明示されなくてはならない。武田氏が指摘されるとおり、私にとって重要なのは「表券主義的象徴貨幣論とは違って、この債務証書＝信用貨幣があくまでも商品の価値を基礎にした債務である」という実質なのである。「計算貨幣」という用語は、しばしば計算のための単位という意味で使われ、「貨幣は記号の一種だ」という方向に拡張される。事実『資本論』においても「計算貨幣」という用語は、ポンドとかドルといった価格の度量標準と

の関連で登場し、相殺可能な債権債務を示す帳簿上の数字を含意することが多く、これに対して、商品の価値を「表現」する貨幣の基本的な機能に対しては「価値尺度」という用語を当てて区別している。「仕様」としての「商品貨幣」＝「計算貨幣」は「観念的抽象化」かもしれないが、「表券主義的象徴貨幣論」とは相容れない。ポイントは、「価値尺度」に必要な「表象」と、「流通手段」に求められる「標章」の違いである。『資本論』における Vorstellung と Zeichen の区別であり、英語で言えば picture と sign、同音異語の硬い訳語では意味不明だが、現代の日本語で「イメージ」と「記号」といえば違いはわかる。両方ともに「実物」ではなく、それに代わる「何か」のことで、その意味で「観念的抽象化」といってもよい。ただ、「イメージ」のほうが実物を写した画像であり、それにそっくりな姿をしているのに対して、個々の「記号」は実物とかけ離れた姿をしており、記号どうしの相互関係が一定のルールで実物の世界を写しだすかたちになっている点で、決定的に異なる。価値表現には、何ポンド、何ドルといった貨幣単位があればすむのか、この「記号」に先だって、価値なるものを彷彿させる「イメージ」が必要なのか。『資本論』を読んで感心させられるのはこうした深い洞察であり、私には《価値表現には『実物』はいらぬ、でもただの『記号』じゃダメだ、そのまえに価値の『イメージ』が必要なのだ》と啓示する。

残念ながらマルクスは、この「表象」の中味を「金銀はその本性において貨幣ではないが、貨幣はその本性において金銀である」というように、貴金属の素材に狭めてしまう。だがここは《価値表現の尺度は単なる「記号」ではすまない。内在する価値をイメージさせる「価値物」が必要とされるのだ》というように開いておくべき開口部なのである。信用貨幣が価値尺度として機能するのは、銀行の債務が多種多様な商品の価値一般を集約してイメージさせるからであり、不換銀行券が貨幣たりうるのも、銀行が確実な資産を有しているからだということになる。この点で、貨幣を記号と捉える表券貨幣、あるいはマルクスが誤ってその存在を容認してしまった「価値標章」としての「国家紙幣」は、「商品貨幣」の実装態である「信用貨幣」と決定的に異なるのである。

■参考：武田信照 「書評『価値論批判』」*1

小幡道昭氏は営々育てた作物の刈り取りの時期を迎えた感がある。これまでの研究業績を集成する論文集が、最近相次いで上梓された。1つは商品。貨

*1リプライの対象とした武田さんの書評です。丁寧で的確な書評に深く感謝申し上げます。

幣・資本という経済学の基礎範疇に独自の考察を試みた本書であり、他の1つが宇野経済学方法論を批判的に検討した『マルクス経済学方法論批判』(御茶の水書房,2012年)である。この2著に先だって、それまでの研究業績を織り込んだテキスト『経済原論』(東京大学出版会,2009年)も刊行されている。これらの著作を特徴づけるのは、小幡氏自身の表現を借りれば「変容論的アプローチ」であり、本書の第I部でも同じ研究視角が貫かれている。本書は2部で構成されている。第I部は「価値の内蔵性」と題され、第1章「種の属性としての価値」、第2章「貨幣の多態性」、第3章「資本の価値増殖」の3章から成る。第II部は「市場の変容」と題され、第4章「市場の無規律性」、第5章「商品流通の構造と資本の一般的定式」、第6章「資本の一般的定式と産業資本」という、同じく3章から構成されている。第1章に書き下ろしの部分を含むとはいえ、基本的に既出論文を取録した論文集である。しかし同じ既出論文ではあるが、第I部と第II部とでは書かれた時期が異なる。第I部は今世紀に入ってから近年の諸論文であるが、第II部は1970～80年代の諸論文である。それぞれが小幡氏のいう「二度の洞窟探検」の際の成果である。

小幡氏は本書の「はしがき」にいう、研究生活初期の最初の洞窟探検では、宇野弘蔵とその影響下の研究者たちが切り拓いたルートをたどって洞窟の奥までいくと、見えてきたのが市場のもつ可換的な構造と全体的な変容を生み出すという特性であった。これに対し、上記先達者たちが『資本論』冒頭商品の分析を批判したときに封じ込めた割れ日から一段地下深くもぐり込んだ2度目の洞窟探検では、金属貨幣と信用貨幣が石筍となってつながり、貨幣価値の不可知性から資本が生成するといった不思議な現象を観察できたという。ここで示唆されている2度の洞窟探検の中身は以下で見ていくとして、明白なのは最初の理論的出発点であった宇野原理論に対するスタンスの変化であろう。

最初の洞窟探検の成果であり、第II部の中心をなす第5～6章については、小幡氏の処女作『価値論の展開』(東京大学出版会,1988年)の「あとがき」に同氏自身による解説があり、この探検の際の問題意識やその成果の概要については、評者が論じるよりも、囲碁などでいういわばこの「自戦解説」に委ねるのが適当であろう。小幡氏の最初の研究テーマは「貨幣の資本への転化」であり、「その際、出発点となったのは、冒頭の商品論において価値実体規定をひとまず捨象し、いわゆる価値形態論の純化を図るという宇野弘蔵氏の方法であつた」という。この研究結果について、小幡氏は「次第に明らかになってきたのは、社会的再生産からの作用を消極化し、市場そのもののもつ特性を抽

出するならば、そこにはそれ自身の内部に価格の変動と分散を生み出す特性が観察されうるという点であった。形態論を拡充する意義は、市場の無規律性の理論化にあるというのがここでの結論だった」といい、宇野氏の価値尺度論も「反復によって価格の変動や分散が次第にある水準に収斂するという意味ではなく、むしろ絶えず反対方向への行き過ぎを伴う再調整の過程のなかで、しかしその揺れが一定の幅に収まるという状態を指しているのではないかと思われてきた」と記す。

このような認識から当時の研究状況をみると、2つの支配的な捉え方に疑問が生じてきたという。1つは「流通論」の範囲で資本の発生を問題とすれば、その増殖は複数の流通圏の間の価格差によるほかないという「世界資本主義」的考え方である。第2は「流通論」はあくまでも社会的再生産と没交渉的な状態にある市場を扱うのだという考え方である。小幡氏は前者に対しては「市場はその絶えざる変動のうちに、自己の内部から安く買って高く売るという行動の場を生成してゆくのだ」という立場を対置し、後者に対しては「市場そのものが、その無規律性の故に、絶えず商品経済的な利得追求の行動に活力を与えるとすれば、こうした市場は、より安く買う場を求めて止まぬ資本の運動に導かれて、隣接する生産の領域に浸透しようとする内圧を有する」という立場、つまり「生産と流通の臨海面」に加わる浸透圧が積極的に問題にされなくてはならない」という立場を対置する。同じ宇野流通論の捉え方を出発点としながら、それを継承する流れの中の支配的な傾向とは、小幡氏は当初より独自の立場をとっていたことが分かる。このような最初の探検の結果については以上に止め、この基本認識の上で試みられた第2次探検に的を絞ることにする。

先ずは、商品・貨幣・資本という基礎範疇を、今あらためて再検討するその問題意識である。小幡氏は、近年のグローバリズムや経済の「金融化」のもとで大きく変容しつつある貨幣や資本の変却無碍な現象、この多彩な市場の変容を射程に収める基本原理を探り出すこと、つまり「変容の原理そのものに迫る必要がある」という。この問題意識の裏側には、これまでの原理論では自己の射程に収まらない新たな諸現象に直面するたびに、それを商品経済外的な不純な要因によるものと見なし、現状分析に丸投げしてきたという強い不満がある。そのような問題意識からなる第1部の諸論文のポイントを順次見ていこう。

第1章は商品価値、なかんずく価値表現の問題である。小幡氏は商品論の冒頭で商品进行分析して価値実体として抽象的人間労働を析出する『資本論』

の論理を斥け、価値実体とその大きさがわかっているとすれば、なぜ、それをもう丁度「表現」する必要があるのかとして、価値形態を論じる意義に疑問を投げかける。同氏は商品に内在する「交換可能性」という性質を価値と呼び、その価値量を表現するのが価値形態論の中心問題だとし、『資本論』の質量分離した論理展開を厳しく批判する。「量的な表現を捨象した同質性の問題」ではなく、価値(交換可能性)をどのように量的に表現するか、つまり「量的関係」「性質の量化」こそが価値表現の核心だというのである。この価値表現の量的関係に社会的な客観性が生じるのは、市場の内部でくりかえし再評価されて形成される相互関係によるものとされる。こうして「一定の幅の価格帯」が形成される。

小幡氏の議論を特色づける今一つの側面は、「種の属性としての価値」という観点である。商品が〈イ固体〉として持つ価格に対して、同種の商品は同じ価値をもつというのがその含意である。この共通の価値をめぐる、すぐ売れる保証のない複数の売り手間に売りを巡って競合(相互の牽引と反発)が生じる。個別的な販売期間は不確定となり、価格はばらつく。価値をこのように同種商品の共通性の面で捉えようとする強い志向と関係するのであろうが、市場の無規律性を強調する同氏の市場像のなかで、やや過大視と思われるほろけているのがこの同種商品の「命懸けの飛躍」をめぐる競争である。

第2章の貨幣論では、信用貨幣の金属貨幣との並行的形成が説かれる。つまり信用貨幣は、社会的再生産を基礎に産業資本の運動のうちに発生するという従来の通説を斥けて、商品流通の基本構造のうちに、それを生み出す営力が内在するとみられているのである。この結論は『資本論』の流通手段論、支払手段論、価値表現論の詳細な批判の中から導出されているが、この部分は割愛して小幡氏によるその根拠づけに焦点を絞ろう。

小幡氏は商品流通では、①売ってから買う、売れなければ買えないというのが正則であること、②個々の売り手には、いつ売れるかが偶然的なものとして現れざるえないこと、そこに深刻な価値実現＝「命懸けの飛躍」の問題が発生することを指摘した上で、こうした市場の構造は、現金売買だけでなく信用売買(債権・債務関係)を生み出す契機を内包せざるえないという。信用売買は大方は債務証書を媒介とした売買であるが、それが持参人払いおよび価値の一般的な表現という形式を具えると、誰にでも譲渡されうる流通性を高めた信用貨幣に発展する。こうして同氏はいう、「商品種に内在する価値の表現と実現、そこに起因する、個別的な販売に不可避的な偶然性との関係を追求すると、商品流通そのものの構造のうちに信用貨幣の萌芽が胚胎されているの

がわかる」と。信用貨幣が商業的發展に伴って独自に發展してきたという歴史的事実が裏付けとして指摘される。これらの議論で強調されているのは、表券主義的象徴貨幣論とは違って、この債務証書＝信用貨幣があくまでも商品の価値を基礎にした債務であるという点である。

信用貨幣は銀行券として本格化する。小幡氏は兌換・不換の銀行券とともに信用貨幣として捉え、その区別は信用貨幣の下位の区分として機能的な相違を明確にすればよいとみる。今日不換銀行券が普及しているが、その淵源をたどれば商品流通自体のなかにその萌芽が宿されていたことになる。これは紙券流通の普及を原理的には説明できない不純な要因（たとえば国家の通貨管理）に依存したものとみる見方を否定し、基本的に貨幣のもつ原理自体に起因すると捉える見方になる。貨幣の「自己変容」である。第3章では、先ず $G-W-G'$ の定式に絡んで、資本生成二貨幣の資本への転化の問題が検討される。

小幡氏は、この定式の矛盾から資本の基本形態を労働力の商品化と直結させる『資本論』の論理を排して、それを広く商品流通一般の中に見出そうとする宇野流通論から出発する。しかしまた、同じ出発点を共有しながらも貨幣増加的観点に傾斜した論者を批判し、資本は単なる貨幣増加ではなく価値を基準とした価値増殖であることを強調する。それでは商品流通のどこに資本の萌芽を見出すことができるのであろうか。小幡氏は「市場は売買差額の発生を不可避的にともない、その内部に資本家の活動を誘発」するという。ただこの「資本家の登場」を促すその市場構造の解明はかなり独特で、キーポイントはここでも「同種商品の価値実現の偶然性」であり、それが一物一価ではなく「一物多価の状態」を生み出すという点にある。それが資本発生にどうつながるのか、貨幣価値の不可知性という議論も絡んでその合意を理解するのは容易ではないが、そうした市場のあり方が資本発生の基盤として押さえられている。こうした議論を踏まえて、次にたんなる貨幣支出ともたんなる商品売買とも違う資本投下の問題が取り上げられる。「資本としての投下」には「期間的、集合的な性格」が伴う。こうした契機を欠けば、「いかに高く売ろうとしても資本ではない」ということになる。しかし個人資本家の場合は、財産一般から投下資本を明確に分離できず、その境界はつねに曖昧になる傾向があるが、この点「出資形式をとる株式資本」のもとで、「資本の投下概念は明確になる」とされる。株式資本は資本の概念のなかにその萌芽をもつということになる。「自己変容」の契機が内包されているのである。個人資本を資本の基本像と見て、株式資本を本来の資本像からの逸脱と捉え、純粋資本主義論

に固執する見方が厳しく批判されることになる。

以上のように、小幡氏は宇野流通論を共通の出発点とする流れの中で、基礎範疇そのものの把握において独自の立場に立つだけでなく、資本主義を自己変容するものとして宇野方法論の枠組みに異論を提示する。それは原理と現実的現象との間を架橋しようとする真摯な思索の結果であつたといつてよい。

紙幅の制限から数点にだけ手短かに論評をつけ加えることにする。1つは価値形態論である。私も価値を差し当たり「交換可能性」と規定して、価値形態論を展開するのは十分可能だと思う。商品世界では、その実体が「象形文字」である価値の一連の表現が、貨幣形態にいたるまで実際に行われてきた。そのような表現のメカニズムと形態展開が価値形態論の課題となる。しかし他方で、宇野流通論の評価にも関わるが、価値実体とその大きさが最初に明らかにされていれば、価値形態論が無意味になるとみる必要はない。実体論は価値形態論にとつては、そこで展開される「交換可能性」の実体が抽象的人間労働であることを分析者の頭の中で事前に確認しているにすぎない。また小幡氏は、量こそ価値形態論の中心問題だとされるが、私は商品価値が他商品の使用価値で表現される表面的事実の背後に、それが可能になるのはその他商品が価値を代表し、価値の化身となることによってであること、貨幣の魔力もここに淵源をもつこと等の質的問題がその核心だと考える。量的関係の調整過程については、その背後で価値実体による規制が働くことをつけ加えて、ご指摘に同意する。

2つは信用貨幣の問題である。私も商品流通そのものから信用売買が生じ、信用貨幣が生まれるというご指摘に同意する。この点の強調は本書の功績の1つであろう。ただ債務証書が流通性を高めて信用貨幣となるには、それが持参人払いおよび小幡氏の表現では「価値の一般的な表現」という形式を具えることが不可欠である。注意しなければならないのは、後者の価値表現の問題である。それは実際には価格で表示される。そうだとすれば、信用貨幣に先だって価値を価格に転化させる計算貨幣(=価値尺度)の存在があるということになる。あらゆる貨幣形態の基礎にこの計算貨幣があるといつてよいが、本書では計算貨幣と信用貨幣の関係が不問のままである。付言すればマルクス価値形態論はこの計算貨幣の形成を論じているのであるが、私はその際チュルゴーの貨幣論が念頭にあったものと推測している。チュルゴーはまたこの計算貨幣の観念的ま由象化を論じていて興味深い(簡単には拙著『近代経済思想再考』ロゴス,2013年,を参照されたい)。

最後は変容論的アプローチの問題である。私は原理の中に現代の諸現象に

つながる萌芽を見出そうとする小幡氏の営為を多としたい。それは宇野純粋資本主義論に対する異議申し立てであって、既に宇野氏の文言の解釈を巡って論争も生じている。その当否には触れない。ただ確認しておきたいのは、変容を促す原理の中の「開口部」としては、信用貨幣としての銀行券と株式資本に関わる部面が取り上げられているが、それはこの二つに限定されるのであろうかという点である。限定されるとすればそれは何故か。逆に「開口部」は他にいくつもあって、全体としての構造的変容の可能性が考えられているのかどうか。今後の理論展開をまちたい。